「海辺の人」

書いても書いても消えていく
消したくないのに消えていく

ざーっと出ては
さーっとさらう
それは波だった

気がつくと海の中にいた
いつの間にか魚になっていた
そうして波と暮らしていた

海中で揺れながら
気持ちよく泳ぐこともできるのかもしれない

作　　**佐藤　茜**
イラスト　**猪原　孝子（つどいに参加のお母さん）**

波＝どもり　　**魚**＝吃音を受容した本人　　**海**＝どもりのある暮らし

作者：吃音を一生付き合っていくものと受容した、当事者の気持ちを考えて書いてみました。砂浜に立ち、吃音と対峙していた人が、一度海に入るとどもりと混ざり合って、それを生活の一部として認めることで、心地よく過ごせるのかもしれない、という希望を表現しました。私は当事者ではありません、そのためこの詩を書くにあたって戸惑いがありました。

佐藤隆治：「書いても書いても消えていく」は、砂浜に、指で字を書いている様子のようですが、これは、なおそう・なおそうとして、なおったつもりになった吃音だけれども、そんな淡い期待が、そのたびに消えていく…と、読み取りました。

作者：はい、その通りです。苦しい、もどかしい気持ちです。

佐藤隆：11 月の吃音五行詩のレッスンのつどいに合わして、茜さんが書いてくださった詩を、小学生達が演じてくださいました。如何でしたか？

作者：感想を言ってくれたこと自体が本当に嬉しくて、内容があまり入ってこなかったのが本当のところで…しっかりとは思い出せないのですが、覚えている範囲では…　小学生男子はみんな、私の意図を汲み取ってくれていたようでした。魚と波と海のそれぞれの意味は分かってくれたようです。吃音があっても付き合っていけばいいというような感想でした。でも、気を遣ってくれたかな？という印象もありました。心の中で本当にそういう風に思えるようになるのには、まだ時間がかかるんじゃないかなと思いました。

佐藤隆：私が、初めて、この詩にお目に掛かれた時、たいへんうれしかった。たとえ、吃音経験されてなくとも、私が良く言う、「フツーにどもって、フツーに生きていく（生きていける）」ということを、どもることとの（自然な　ありたき）付き合い方…を、ちゃんとご理解してくださっている。

　吃音でなくとも、別の人生のテーマ（なかなか受け入れがたい…感じで、えてして、深い悩みの淵をのぞきそうになる。しかし基本的に治らないものなので、付き合う…という考え方に行き着く…）を、お持ちかと思います。入口は違えども、思い測りうる場合はちゃんとあるようです。

作者：吃音は**周囲の理解さえあれば普通に生きて行く上で何の障害にもならず、本人が必要以上に苦しむ必要の無くなるもの**だと私は思います。（先輩のSさんの受け売りですが…）　だから私も、吃音の方とお話ししていて何も気にする部分ありませんし、**自分も海の一部でありたい**と思ってこんな詩になりました。